

'92河合塾文化行事⑩

〈講演+パネルディスカッション〉

「澁澤龍彦とその世界」

■日時／10月2日(金)17:00～

■会場／河合塾千種校体育館

PROGRAM

第1部

講演／「澁澤龍彦の文学」出口裕弘先生

インテルメツツオ

舞蹈／原田伸雄(国語科講師)

音楽／遊星ミツ、ザボン・ドボン

第2部

パネルディスカッション「澁澤龍彦を語る」

パネラー／出口裕弘、天野天街(少年王者館主宰)

河田育子(国語科講師)、高木喬(国語科講師)

原田伸雄(国語科講師)、前島良雄(国語科講師)

司会／鈴木互(国語科講師)

講演者プロフィール

■出口裕弘(でぐちゆうこう)

1928年、東京に生まれる。東大仏文科卒業。元一橋大学教授。フランス文学者、小説家。主としてフランス第2帝政期の詩と小説の研究を専門とし、「ボードレール」、「ロートレアモンのパリ」などの著書がある。一方、バタイユを中心とする20世紀思想関係の翻訳紹介でも知られている。他の著書に「行為と夢」、翻訳にユイスマンス「大伽藍」など。また小説家としては、自在な語り口で独自の世界を描いた「京子変幻」、「越境者の祭り」、「私設・東京オペラ」などの作品がある。



Tatsuhiko Shibusawa

PROFILE

澁澤龍彦(しぶさわたひこ)

1928年、東京に生まれる。東大仏文科卒業。マルキ・ド・サドをはじめとして、ユイスマンス、コクトー、バタイユなど、わが国の「正統」的な文学觀からは全くとらえられていなかった作家たちの翻訳・紹介者として出発。以後、人間精神や文明に独自の方向から光をあてる、従来の日本文学には稀なきわめてリヴィレスクな作品を発表し続けた。評論集に、『サド復活』『夢の宇宙誌』『幻想の画廊から』『胡桃の中の世界』『思考の紋章学』『ドラコニア綺譚集』『私のプリニウス』などがある。また、小説には、初期のものに『エピクロスの助骨』『犬狼都市』、長い中断をはさんで『唐草物語』『ねむり姫』『うつろ舟』、そして、長編『高丘親王航海記』がある。87年8月5日歿。享年59歳。

澁澤龍彦遺作「高丘親王航海記」上演水先案内

馬場駿吉(名古屋市立大学教授・俳人・美術評論家)

「高丘親王航海記」は故澁澤龍彦さんの遺作となった夢幻的な長編小説—主人公高丘親王は平城帝の皇子として生まれたが、藤原葉子の乱に巻き込まれて地位を失い、後に佛門に帰依した実在の人物である。唐に渡り、さらに天竺(インド)へ向かう途中、病を得てマレー半島付近で没したとも伝えられている。この小説はそうした波瀾に富んだ人物像を借りつつ、南方への航海の行く手、行く手に怪奇な動物や半獣人を登場させ、親王の好奇心と夢が織りなす時空のパノラマ像を次々と展げて見せる。そうした奇想、幻想の船に揺られているうちに、読者は〈真珠〉という章にゆきつく。親王に確かな死の予感が訪れるとともに、やがて不慮の事態から呑み込まれた真珠がどの奥を塞ぐ。異物感、痛み、声がれ、息苦しさ—澁澤さんがこの章を執筆中に明らかに自覚し、その病名までも見透かしていた下咽頭・咽頭癌の症状が、極めてリアルに描かれているのだが、自らの生命をも奪う腫瘍を真珠に変容させた澁澤さんの壯絶かつ冷静な美意識には、全く驚くほかない。澁澤さんの訃報を受けたのは昭和62年8月5日—慈恵医大の病室にお見舞いに行った丁度一ヶ月後だった。「高丘親王航海記」の終章〈頻伽〉の末尾近くに“モダンな親王にふさわしく、プラスチックのように薄くて軽い骨だった”とあるが、四谷シモンと箸先を揃えて拾った澁澤さんの骨も透き通るように白く軽い骨だった。幻想と現実、過去と現在を自由に帆走する「高丘親王航海記」を脚色、上演しようという試みは、思えば無謀といえなくもない。しかし、〈無謀〉に賭けるスリリングな舞台にお目にかかることが少なくなった昨今、あえてこうした試みに身を挺し、新しい演劇の時空を拓こうとする天野天街とそのスタッフの心意気に私は大いに共感するのだ。この公演が七ツ寺共同スタジオ創立20周年記念として大成功を収めることを心から祈りたい。

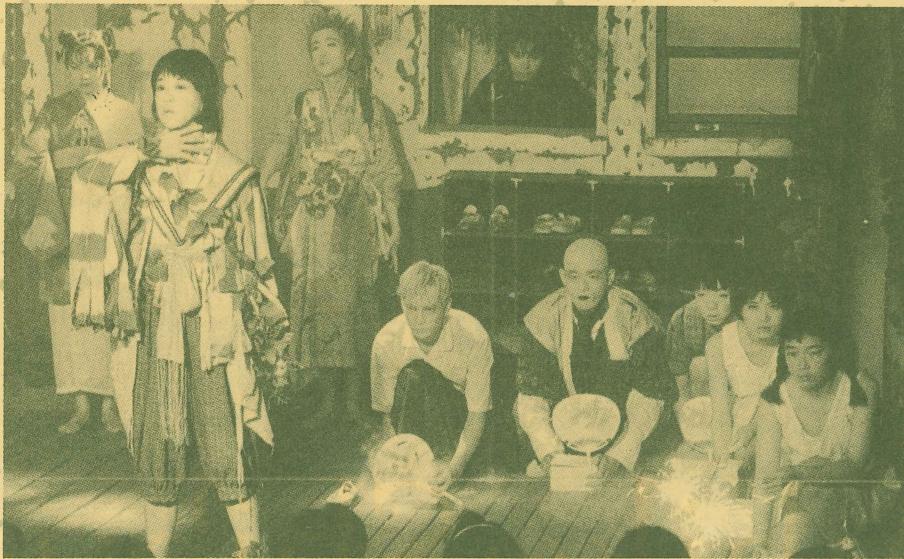
Tatsuhiko Shibusawa

七ツ寺共同スタジオ創立20周年
少年王者館創立10周年記念企画公演
「高丘親王航海記」

原作 澁澤龍彦
脚色・演出 天野天街
1992年11月17日(火)～23日(祝)
18:00開場、18:30開演
名古屋市白川公園内 野外特設劇場
前売4,000円、当日4,300円
連絡先 七ツ寺共同スタジオ (052)221-8646

「高丘親王航海記」上演記念
澁澤龍彦著作展

初版本、直筆原稿等も展示します。
10月31日(土)～11月23日(祝)
ちくさ正文館書店本店・文学書売場
名古屋市千種区 地下鉄・JR千種駅東
(052)741-1137 [P]有
午前10時～午後8時 年中無休



'92 河合塾 文化行事②

〈映画+トーク〉

アジアから吹く風

◆司会 石原 開・山田伸吾(国語・小論文科講師)

◆日時 6月6日(土)

14:00~18:00

◆会場 16号館名古屋校 6階 サクセスホール

◆内容 映画上映

「アイ・ラブ・ニッポン」

「あふれる熱い涙」

トーク

天願 大介(監督)

田代 廣孝(監督)

ルビー・モレノ(主演女優)

主催 河合文化教育研究所

「アイ・ラブ・ニッポン」



映画 「アイ・ラブ・ニッポン」

1991年、アジアンビート製作プロジェクト

監督／天願大介

主演／永瀬正敏、ルビー・モレノ

*TOKIOは都内のあやしげな興信所に勤める26歳。
ある日、路上でフィリピン娘と知り合う。……。

「あふれる熱い涙」



映画 「あふれる熱い涙」

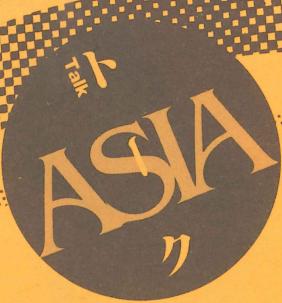
1992年、シネバレエ

監督／田代廣孝

主演／佐野史郎、ルビー・モレノ、戸川 純

*東北の農村にフィリピン女性が嫁いだ。……。





トーク出席者

- ◆天願 大介(監督)
- ◆田代 廣孝(監督)
- ◆ルビー・モレノ(主演女優)

今、日本映画は、日本の中のアジアに活路を見出そうとしている。

八十年代以降、アジア諸国の人々を中心とした多くの外国人たちの流入によって、日本には今までに見られなかった新しい事態が生じている。そして、なぜかこの新しい事態がとくに日本の若い映画人たちを刺激し、昨年あたりから日本の中のアジア人たちをテーマにした映画がつぎつぎに公開されている。『ワールド・アパートメント・ホラー』(91年、大友克洋)、『アイ・ラブ・ニッポン』(91年、天願大介)、『あふれる熱い涙』(92年、田代廣孝)、『G(コンビニエンス)・ジャック』(92年、当摩寿史)といった作品がそれである。この傾向はなにも若手の監督たちに限ったことではない。ベテランの大林宣彦も『北京的西瓜』(89年)で中国人留学生を描いていたし、柳町米男も新作『愛について、東京』(92年公開予定)で日本に住む中国人留学生たちの厳しい現実を描き出しているという。さらに、最近急死した小川紳介も、『あふれる熱い涙』同様、フィリピン花嫁を描く新作に着手していたらしい。

それでは、なぜ日本映画はいまこれほどまでに日本の中のアジアという現象を好んで取り上げようとしているのだろうか。一つには、最近、香港・台湾・中国などの映画が世界的に注目を集めており、そのことが日本の映画人たちの眼をアジアの方へ向けさせているという理由が考えられよう。しかし、なによりも、日本の中のアジアという現象がはらんでいる越境性、多国籍性、混血性といったことが理由として考えられるのではないだろうか。ハリウッドの歴史を見渡してみれば明らかなように、映画をたえず活気づけてきたものに、越境性、多国籍性、混血性といった事態がある。そして、日本の映画人たちは、今日の日本映画の閉塞的な状況を開拓する道を、日本の中のアジアという現象がはらんでいるこの越境性、多国籍性、混血性に見出そうとしているのではないだろうか。

アジアから吹く風

トーク出席者プロフィール



天願 大介

1959年東京生まれ。琉球大学卒業後、新潮社に入社。編集者として活躍する一方、舞台・映画の台本・脚本を手がける。学生時代から、8ミリ映画を自主製作。『草を刈る男』(87年)、『考えてはいけない』(89年)、『真智子の秘密』(91年)。1990年、初の16ミリ作品『妹と油揚』が『アフィルムフェスティバル』で審査員特別賞受賞。



田代 廣孝

1959年宮城生まれ。地元高校を卒業後イギリス留学。画家を目指して絵画の勉強をしながら8ミリ映画の自主製作に取り組む。新藤兼人監督に師事し、『落葉樹』、『ブラックボート』、『さくら隊散る』に助監督として参加。1992年、『あふれる熱い涙』で監督としてデビュー。



ルビー・モレノ

1965年フィリピン・マニラ生まれ。テレビ朝日系「タモリ倶楽部」のレギュラー出演を経て、テレビの長時間ドラマ数本に出演。「あふれる熱い涙」、「アイ・ラブ・ニッポン」、「ありふれた愛に関する調査」ほか、映画出演多数。